

国士舘大学審査学位論文

「博士学位請求論文の内容の要旨及び審査結果の要旨」

「サービス産業化にともなう葬儀サービスの空間構造の
変容に関する経済地理学的研究」

藤岡 英之

氏 名 藤岡 英之
学位の種類 博士（人文科学）
報告番号 甲第62号
学位授与年月日 令和4年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 サービス産業化にともなう葬儀サービスの空間構造の変容に関する
経済地理学的研究
論文審査委員 (主 査) 教授 岡島 建
(副 査) 教授 内田 順文
(副 査) 教授 加藤 幸治

博士論文の要旨

題 目 サービス産業化にともなう葬儀サービスの空間構造の変容に関する経済
地理学的研究

氏 名 藤岡 英之

学位論文要旨

研究科 人文科学研究科

氏名 藤岡英之

1. 題目(外国語の場合は、和訳を併記する)

サービス産業化にともなう葬儀サービスの空間構造の変容に関する経済地理学的研究

2. 要旨(2000字程度にまとめる)

これまで消費者サービス業の研究は、小売業とともに中心地の階層性を測る指標として使われることが多かった。また、大都市圏の郊外化による大規模な人口移動との関係が論じられることもあったが、これもさまざまな社会状況の変化に従う業種との見方が根底にあったように思われる。小規模な業種が多く、影響力も小さいことから、個々の業種を取り上げて研究されることも少なかった。しかし、消費者サービス業のうち葬祭業は近年になって葬儀をトータルにサポートするサービス業として成立しており、葬祭業者による葬儀会館も普及するなど変化の只中にあることから、本研究では葬祭業を取り上げる。本研究の目的は、葬儀の担い手が喪家の近隣の人々から葬祭業者に移ることによって生じる葬儀サービスの空間構造を明らかにし、その要因を考察することである。宇都宮市と、長崎市と周辺2町の2つの地域を事例に、葬儀会館の立地の分布と、これを利用する喪家(遺族)の自宅の分布や、自宅から葬儀会館までの距離などを分析した。資料には、地方新聞のお悔やみ欄の記事を利用し、事例地域の葬祭業者への聞き取りも行った。

2つの事例地域において、葬儀会館はどちらも DID の内部、市の中心部から設置され始め、DID の縁辺部へと拡大していった。さらに DID 外部にも何か所か設けられている。喪家は、それまで主に自宅で行われていた葬儀に代わって、葬儀会館での葬儀を選択するようになった。葬儀会館を利用する喪家は、基本的に自宅近くの葬儀会館から選択する傾向にあった。

自宅などから葬儀会館への、葬儀の場所の変化の状況を全国的に確認し、その背景を検討したところ、葬儀の担い手が葬祭業者に移行することにより、葬儀会館の利用が増加したことが示唆された。つまり、葬儀会館の立地拡大の要因は、これまで考えられてきた人口の増加(葬祭業の場合は死亡人口の増加)、人口密度の上昇(葬祭業の場合は死亡人口の密度)、所得の上昇などではなく、葬祭業者が葬儀会館という新しいサービスを広めようとする取り組みにあることがわかった。

また、近隣からの手伝いに頼れなくなり、葬祭業者によるサービスを利用するようになった喪家は、葬儀の場所(葬儀会館)を選択しなければならなくなった。これを逆に葬祭業者の側から見れば、個々の顧客の困り込みが課題となったことになる。事例地域では、冠婚葬祭互助会や葬

祭業者独自の会員制度が設けられ、組織的な顧客囲い込みが図られていた。これに対応して、葬儀会館の設置は、顧客を空間的に囲い込もうとする取り組みであると考えられる。自宅近くの葬儀会館から選択する喪家は、葬祭業者からみれば、葬儀会館の周辺から利用してもらえる顧客である。こうした顧客の空間的囲い込みを強めるため、葬祭業者は葬儀会館の設置を進めていった。

しかし、事例地域には、例外的とはいえ自宅近くの葬儀会館に囲い込まれない喪家も存在した。宇都宮市では公営の火葬場が郊外に移転し、併設されている葬儀式場において、従来の習慣である葬儀・火葬後の会食を簡略化した儀式を、自らは葬儀会館を持たない葬祭業者が提案するようになった。自宅からの距離は民間の葬儀会館のほうが近いものの、公営という安価なイメージと簡略化した儀式（とくに会食）を支持する喪家の利用が増え、その利用圏はDIDの内部からさらにその外側へと広がっていった。簡略化された葬儀は、自ら葬儀会館をもつ葬祭業者にはない「差別化された」サービスである。葬祭業者はこうしたサービスを創出したことによって、遠方に自宅をもつ喪家を顧客に取り込むことができた。

では、こうした新しいサービスは、どのようにして生まれるのだろうか。サービスの特性として、時間・空間の特定性があり、そのために一過性、つまりその場限りの働きがあることが示されている。反復されることがないから、極端に言えば毎回、異なるサービスが生産され、消費されている。そして、そのサービスに対する利用者の反応は、その場でダイレクトに得ることができる可能性がある。高い評価を得たと考えられるサービスが葬儀会館内で、あるいは葬祭業者の内部で共有されれば、それはやがて他社と差別化されたサービスとなりうる。つまり、時間・空間の特定性のもとで行われる日々の実践が新しいサービスを生むのである。

このように、葬儀サービスの空間構造の変容は、葬祭業者による空間的囲い込みと新しいサービスの提案のなかから、喪家が何を選択するかによって引き起こされている。

氏 名 藤岡 英之
学位の種類 博士（人文科学）
報告番号 甲第62号
学位授与年月日 令和4年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
学位論文題目 サービス産業化にともなう葬儀サービスの空間構造の変容に関する
経済地理学的研究
論文審査委員 (主 査) 教授 岡島 建
(副 査) 教授 内田 順文
(副 査) 教授 加藤 幸治

博士論文審査結果の要旨

題 目 サービス産業化にともなう葬儀サービスの空間構造の変容に関する経済
地理学的研究

氏 名 藤岡 英之

学位論文の審査結果の要旨

人文科学研究科博士課程

専攻名	人文科学専攻	学籍番号	14-DH001	氏名	藤岡 英之
-----	--------	------	----------	----	-------

本論文は、近年遺族が葬儀を地域社会から葬祭業の手に委ねるようになり、さらに葬儀の場所も故人の自宅から葬儀会館へと変化してきた状況の中で、葬儀会館の立地を明らかにするとともに、遺族が利用者として葬儀の場所をどのように選ぶかを、地元新聞のお悔やみ欄を使って検討し、葬儀の担い手が葬祭業に変化することによって生み出される葬儀サービスの空間構造の変容を明らかにし、その要因を考察したものである。

本論文は7章から構成されており、まず第1章と2章では経済地理学における消費者サービスの従来の研究が詳細にレビューされ、その結果をもとに上記のような研究目的が的確に設定されている。つづく第3章では『特定サービス産業実態調査』を用いた全国スケールでの葬祭業の動向を明らかにし、第4章では各都道府県の主要な県紙を対象として新聞の「お悔やみ欄」を調査することで各都県の葬儀の場所の特性をまとめ、その結果をもとに葬儀会館の利用という指標を用いて、2000～2010年における変化を各種統計指標との関連から計量的に分析し、その特性を明らかにした。さらにその実証的な研究例として第5章では栃木県宇都宮市を事例とし、第6章では長崎市を事例として、地元新聞の「お悔やみ欄」の記事を利用し葬祭業者への聞き取りを併用することで、葬儀会館の立地の分布とこれを利用する遺族の自宅の分布や、自宅から葬儀会館までの距離などを的確に分析している。

以上の結論（第7章）として、2つの事例地域において葬儀会館は市の中心部から設置されはじめ、その後周辺部へと拡大しており、遺族はそれまで自宅で行っていた葬儀に代わって自宅近くの葬儀会館での葬儀を選択するようになったこと、その背景には葬儀の担い手が葬祭業に移行することによる葬儀会館の利用があること、葬儀会館の立地拡大の原因は人口増加や人口密度の上昇や所得の上昇などではなく葬儀会館という新しいサービスを広めようとした葬祭業者の取り組みにあることが明らかにされ、葬儀サービスの空間構造の変化は葬祭業者による空間的困り込みと新しいサービスの提案の中から遺族が何を選択するかによって引き起こされていると結論づけている。

本論文は、いまだ地理学において十分な研究がなされていない葬儀サービスに着目し、葬儀サービスとくに葬儀会館の立地と利用構造を経済地理学の立地論の視点から解明しようとした研究として、十分な成果を上げていると評価でき、地理学への寄与という観点からも価値は高い。今後検討すべきいくつかの課題もいくつか残されているが、本論文の内容は、すでに3本のペーパー（うち2本は査読付きの論文）として活字化されており、上述のように地理学の研究論文として十分な独創性と学術的意義を有していることは明らかである。以上の審査結果より、課程博士論文として合格とする。